

## 「瓶の蓋」と「ペットボトルの栓」

瓶の蓋を開け閉めすることは日常生活で常なることである。小さいものではペットボトルの栓を開け閉めすることを含めて誰でもが日々その回数には無頓着に行なっている平凡な行為である。瓶の蓋や栓を締め忘れると大変なことになるにもかかわらずである。

昨今では多方面のリスクに対処するために初回の開栓にかなりの力が必要になり、開栓できないことが多く、近くにいる若い人に頼むことも少なくない。そのことを避けるためにペットボトルを買わなくて済むように手軽な魔法瓶を持つようにしている。

この魔法瓶の蓋を規定通りに閉めることを怠るとカバンの中が水害に合うということもしばしばである。歳を重ねるということはこういうことなのだと言っている。諸先輩がたも同じように悩まれてきたのだと思う。今から20年ほど前の話だが、恩師滝沢陽一先生ご夫妻が健在であられた頃、瓶の蓋の開け閉めが論議になった。先生は「閉める前に、少し逆回しにするとスムーズに閉められる」と言われ私に「君も実験してみたまえ」と勧められた。その場で実験をすると「なるほど、うまくいきますね」と答えると、すかさず、奥様とお嬢様が「それは偶然ですよ」と笑いながら水をさされた。奥様は「そんな面倒なことをしなくても、ちゃんとすれば初めからスムーズに閉められます」と仰るのであった。ど



ちらが正解であるかは私には分からないが、この時の会話と実演は今も忘れられない。毎日魔法瓶やジャムの瓶類の蓋をする時には、必ず、まず、逆回しをして閉める習慣が私にはついている。そして、その度に恩師ご夫妻を思い出す。ありふれた無意識の行動をとりながら恩師への感謝が湧いてくるそして「先生、ありがとうございます」と心の中で言葉が踊る。幸せな瓶の蓋の開け閉めである。この頃は毎日を「噛み締めて」生きれるようになっていく。そして、目覚めるときに「ああ、今日も生きるんだ」と感謝することができるようになった。

噛み締めて瓶の蓋をあけくれる。

# パリ通信・第161号

シュザンヌ・ヴァラドン

五月晴れのポンピドゥー・センターに「シュザンヌ・ヴァラドン展」(2025年1月15日～5月26日)を見に行った。20世紀初頭のモンマルトルで絵を描くことに没頭した女性画家である。

シュザンヌ・ヴァラドン(1865-1938)の本名はマリー＝クレマンティーヌ・ヴァラドン、リムーザンで生まれ、母親は女中、父親は誰だか分からない。生後まもなくモンマルトルに引越し母親と



二人で貧しい生活を送る。生活費を稼ぐために14歳から美術学校や画家のアトリエでモデルを始める。シャヴァンヌ、ルノワール、ロートレックなど彼女をモデルに多く名作が描かれた。20世紀初頭、絵画、音楽、芸術が頂点にあるモンマルトルという特異な地で、ヌードモデルで生計を立てるマリーはシャヴァンヌ、ロートレックらと愛人関係を結ぶ。長老たちの前で裸になることから絵画「シュザンヌと長老たち」に倣ってシュザンヌ・ヴァラドンと名乗る。

1882年スペイン人画家ミゲル・ユトリロと知り合い、1883年モーリスが生まれる。当時シュザンヌには複数の愛人がいて、誰が本当の父親かはシュザンヌは明らかにしなかったが、ユトリロが法的に父親になることを承認した。

20世紀初頭、美術学校に女性は入学できない。母親を支えるシュザンヌに画家のアトリエに通う経済的な余裕はない。画家たちのモデルをしながら、彼らが描く絵、展開する絵画理論を身につけて自身も絵を描くようになる。モデル時代が絵画修行になったのである。

1890年代からシュザンヌの画家としての才能を認めて助けたのがエドガー・ドガである。男性社会である芸術の領域に女性が参入するのは極めて困難な時代だ。ドガの紹介でサロンに出展することで画家としての道が開けたのである。カミーユ・クローデル、ベルト・モリゾ、マリー・カサット、マリー・ローランサンと



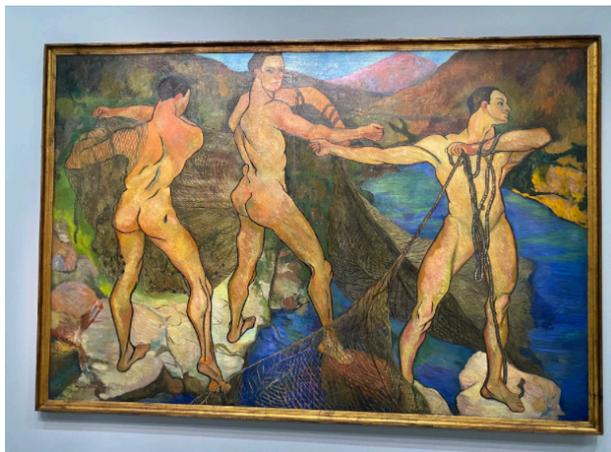
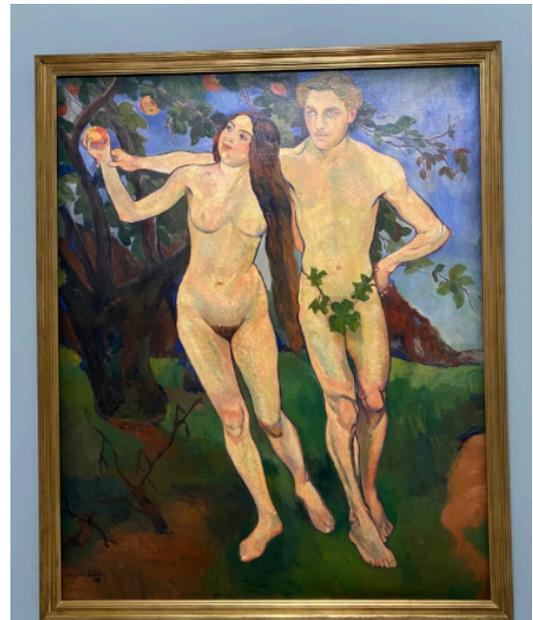
女性がようやく名を成す時代になった。とは言え、母親と幼いモーリスとの生活苦は続く。モーリスは精神病と診断され、その治療の一環として母シュザンヌが息子に絵を教え、画家モーリス・ユトリロとなる。



1896年生活安定のため、裕福な実業家と結婚するが、息子モーリスの友人アンドレ・ユッテールと一緒に生活するために1910年離婚し、シュザンヌの母、息子モーリス、愛人アンドレの4人家族の生活を送る。1914年第一次世界大戦が勃発すると出兵前にアンドレとシュザンヌは正式に結婚する。この時期を象徴するのが「家族の肖像」(1912)である。

右手を胸に当てて私たちを見据えるシュザンヌ、頬を付いて考え事をするモーリス、シュザンヌに守られる母、愛するアンドレ、家族の中心として、シュザンヌの意思の強さを表現した作品である。アンドレとの幸せな出会いから生まれた「アダムとイヴ」

(1909年)はヴァラドンらしい一枚であろう。裸婦は伝統的なテーマであるが、男性画家にのみ許され、女性が描くことは稀であった。裸婦はその時代の美の象徴である。女性が描く裸の男女、しかもアダムとイヴという宗教的な価値を持った題材に対して性的なコノテーションや宗教感なく描いたのである。アダムの腰のぶどうの葉は非難を受けて加筆されたのである。同じくアンドレをモデルに描いた「網を投げる男た



ち」(1914年)も、貧しい環境であったが故に、社会的な価値観や因習に囚われることなく、ヌードになり、性を観察し、女性の視線で絵を描くことに集中したシュザンヌ・ヴァラドンならではだろう。

シュザンヌ・ヴァラドンとモーリス・ユトリロの二人の画家が絵を描き、アンドレが画商や評論家の相手をする。三人は衝突し

ながらも成功を博して、リヨン郊外のシャトーを購入し風景画も描くようになる。シュザンヌ・ヴァラドンの絵の中には、ルノワール、セザンヌ、ドガ、ロートレック、マチス、マネ、同時代の画家たちがいる。鋭い観察力で彼らから学んだものを自分自身の絵とした意思の強い尊敬すべき女性だと思う。(古賀順子記)